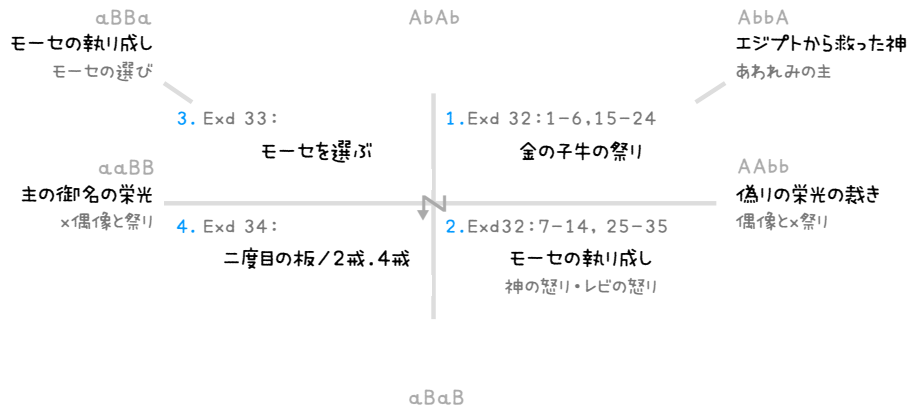




出エジプト記32-34章



出エジプト記32章から34章の分析です。

4つの段落に分かれています。32章も4つに分かれてababというつながりが特に強いと思います。1節から6節、15節から24節がひとつのくり、7節から14節と25節から35節がひとつというふうに分けています。そして33章、34章というこの4つです。（モーセが）命令を頂いて降りてくる時にアロンが金の子牛を造って祭りをしてしまったというところ。エジプトから連れ上った神はこれだと言って金の子牛を造って「だから主の祭りをしよう」というふうにあロンが言ってしまいます。それに対してモーセが執り成しをします。神様が怒ることに対してモーセが執り成しをし、今度はモーセが民に向かって怒ってレビがその怒りをあわらすというようなことがあります。33章34章は主がモーセを選んだ、その選んだことを確認して主の御名の栄光を見たいというふうにあります。2度目に板が与えられて、主の御名の栄光が現される。主はあわれみ深く恵み深い、怒るのに遅く慈しみとまことに豊かな神であるというのが34章6節にあります。これが主の名の宣言です。33章にも「わたしの名は」ということで、恵もうと思う者を恵み、あわれれもうと思う者をあわれむというのが主の名であるということが宣言されていますので、33章と34章のところにあります。

大きなつながりとしては、aabb。前半、後半というところを見ると、前半は偽物の栄光である金の子牛に対して裁きが下る。偶像と偽りの祭りをするというのが前半です。

後半は、あわれみの栄光が現される。真の神様があわれみの栄光を現して、偶像じゃない本当の神様に対して本当の生贄を捧げて祭りをするというのが後半です。にせの栄光とあわれみの栄光という対比があります。abbaのaの部分は、エジプトから救ったあわれみの神と偽物の神が平行しています。abbaのbbのところは、モーセが執り成す、モーセが選ばれる、モーセが神様の代表である、神様とモーセが一つになっているということが、このbbのところで見えます。aaのところは、あわれみの神、モーセによって救われたことに対する民の応答の誤ったものと正しいものということも言えます。神様の民について、神様が選んだリーダーについてということが言えると思います。

全体としては、「主の御名の栄光」対「金の偶像」というのがこの段落で、主の御名の栄光が豊かに現されるということと裁きの恐ろしさということで、34章6節の主の御名の宣言に書いてあるとおりだということだと思います。